

# れきしみち

2025.1  
No.135

## 特集 P.2 企画展 季節を祝う



- P4 「第14回松平シンポジウム報告」
- P6 連載「安城にゆかりのある人々2」
- P7 展覧会関連イベント／冬の催し物案内
- P8 令和6年度 博物館実習報告／市民ギャラリーよりお知らせ

## 令和6年度 博物館実習 報告



令和6年度の博物館実習は7月31日から8月8日のうちの6日間で行いました。博物館実習は学芸員資格取得を目指す学生を対象に受入れを行っており、今年度は3大学3名の学生が博物館業務などの講義や資料取扱いの実習に臨みました。

当館の実習では博物館で行われている業務を学ぶ講義、実物資料を用いた歴史・考古・民俗・美術工芸資料の取扱い実技、そして常設展示室の展示替えを行います。学生個人の専攻に関わらず、幅広い分野の業務が学べるのが特徴です。

なかでも常設展示室の展示替えは、展示構成の検討から資料の選定、キャプションの作成までの実習を行います。今年は「東からの風(安城の中世)」のうち、「三河真宗の美術」の展示替えを行いました。一部資料は展示替えの対象外としたため、全体のバランスを考えながら資料を選定し、展示構成を検討しました。展示替え後は当館職員や学芸員の前で展示解説を行い、展示替えの意図や展示資料について解説しました。アドバイスをもとに展示を修正し、6日間の実習を終えました。

令和7年度も引き続き博物館実習の受け入れを予定しています。意欲のある方のご参加をお待ちしています。



講義



民具実習



展示替え

### 令和7年度 博物館実習生の 募集

令和7年度の博物館実習の募集を行います。実習は令和7年7月30日から8月7日(8月2日～4日は休み)を予定しています。安城市歴史博物館のホームページより申込書をダウンロードし、安城市歴史博物館受付までご持参ください。  
申込期間：令和7年2月1日(土)～2月28日(金)

### 安城市民ギャラリーよりお知らせ

#### 企画展 「丸山今朝三展～永遠なる自然との対峙～」

これまで安城市では、地元ゆかりの美術作家の作品を収集してきました。今回の展示では、令和7年に80歳を迎える丸山今朝三氏の画業を紹介します。



(凛然) 個人蔵

[開催期間] 令和7年2月15日(土)～3月1日(土)  
 [休館日] 月曜日 ※2月24日(月・振休)は開館  
 [開館時間] 9:00～17:00  
 [会場] 市民ギャラリー展示室D・E  
 [観覧料] 観覧無料  
 [主催] 安城市、安城市教育委員会  
 [協力] 安祥文化のさと地域運営共同体

### 安祥文化のさと

「安祥文化のさと」とは安城市にある松平氏四代50年の居城跡を整備した安祥城址公園一帯の名称です

#### [全館共通事項]

住所 / 〒446-0026 愛知県安城市安城町城堀30番地  
休館日 / 毎週月曜日(祝日の場合は開館)、年末年始(12/28-1/4)

安城市歴史博物館 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-6655 FAX:0566-77-6600

安城市民ギャラリー 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-6853 FAX:0566-77-4491

安城市埋蔵文化財センター 開館時間 / 9:00～17:00  
TEL:0566-77-4477 FAX:0566-77-6600

安祥公民館 開館時間 / 9:00～21:00  
TEL:0566-77-5070 FAX:0566-77-6062

公式HP、SNSもご覧ください

安城市歴史博物館

URL / <https://ansyobunka.jp/>



# 季節を祝う

観覧無料

令和7年 2月8日(土)～3月23日(日)

休館日 毎週月曜日 ※2月24日は開館 開館時間 9時～17時(入館は16時半まで)

「暦の上では春」と言いますが、この春とは立春(今年は二月三日)を指します。このような季節の節目には、古来から季節の移り変わりを祝う行事が行われてきました。

## 季節と節句

古代中国では、太陽の運行に従って冬至・春分・夏至・秋分を設け、その中間に立春・立夏・立秋・立冬をおいてこれを季節の始まりとしました。

冬至や立春などは節気とも呼ばれ祝われてきました。古語(節供)も季節の節目を示す言葉です。古代中国に由来する陰陽五行説では暦の上で月と日に奇数が重なる重日である一月一日・三月三日・五月五日・七月七日・九月九日が吉日とされ、邪気を払う行事が行われました。

この思想が日本に伝わったのは奈良時代だといわれています。古代の法典である「令」のうち雑令には、正月一日や三月三日、五月五日などが節日と定められており、日本初の正史である「日本書紀」にも節日を祝う宴が開催されていたことが書かれています。しかしまだ節供という言葉は節日と同義ではなく、「節の日に供える供物」を意味するものでしかありませんでした。

江戸時代に入り、元和二年(一六一六)頃までに

なります。さらに大正期には内裏に見立てた御殿つきの雛飾りが登場し、昭和初期から戦後にかけて流行を見せました。当館でも、主に近代に作られた雛人形をいくつか所蔵しています。写真(2ページ左下)の雛人形は福釜村(市内福釜町)の庄屋だった岩間家に伝わった、娘の初節句に贈られたものです。京都の丸平大木人形店で眺えたもので、明治四十四年(一九一一)までに作られたものと伝えられています。



土人形(内裏雛)

また近代から昭和三十年代頃までの当地域では、土人形のお雛さまを飾る習慣がありました。土人形は子どもの成長の節目ごとに購入するもので、男雛・女雛に限らず歌舞伎の演目や歴史の名場面を題材とした人形を購入することもありました。

## ② 端午

菖蒲の音が尚武に通じることから、鎌倉時代から武家を中心に普及しました。江戸時代には男子の節句として盛んになり、「月次風俗絵巻」には幟や吹流し、兜や人形が屋外に飾られる様子がみられます。幟は鍾馗などの武者絵が描かれた絵幟も好んで飾られました。現在よく飾られる鯉幟は、江戸時代中期頃より見られるようになります。当初は和紙で作られており、当館の資料にも反故紙などを利用した鯉幟がみられます。

江戸中期以降には幟や人形はしだいに小型化



「令義解」雑令

江戸幕府によって人日(一月七日)・上巳(三月三日)・端午(五月五日)・七夕(七月七日)・重陽(九月九日)の節日は五節供と定められます。節供は節の日自体を指すようになり、大名たちの間では季節を祝う行事が定着し、しだいに庶民にも広まっていきました。なお節句と書き表されるようになるのは、江戸時代中期以降のことです。

## 季節を祝う

節句には現代でも親しまれているものもあれば、あまり聞かなくなってしまうものもあります。この章では江戸時代に定められた五節供を軸に、季節を祝う行事について一部ご紹介いたします。

## ① 上巳

現代では「ひな祭り」として親しまれています。元々は上巳と呼ばれ、水辺で禊をして穢れを

し、屋内用の内飾りが普及します。現代の五月人形でも馴染みのある鎧や兜のほか、多様な武者人形が飾られました。

## ③ 七夕

七夕は牽牛と織女が一年に一度天の川を渡って逢瀬するという伝説と、裁縫などの技巧の上達を願う行事である乞巧奠が中国から伝わり、さらに日本の棚機女の伝承と習合して発展したものです。笹に短冊を飾って願い事をする現在のようにな形になったのは江戸時代のことです。華やかな市中の様子は「名所江戸百景」などの浮世絵にも描かれています。

また安城を含む旧碧海郡には、写真のような「額飾り」を飾る風習がありました。これは額と呼ばれる芝居の舞台を小さくしたような木枠の中に、歌舞伎の演目などを題材とした人形を飾る一種のジオラマのようなものです。七夕の前になると、子どもたちは駄菓子屋などで元絵を買い求め、毎年新しい額飾りを作って七夕の夜に飾りました。



「額」複製 仙台萩御殿場

重なる吉日とされてきました。菊には延命長寿を助ける効果があるとされ、菊花酒を飲んで悪気を払う風習がありました。



十二月月風俗画帖

日本では一時廃れたものの、江戸時代には五節供の一つとなりました。「東都歳時記」には「重陽祝儀諸侯花色小袖御登城」とあり、特に武家では重要な節日だったことがわかります。庶民の間にも菊の節句として広まり、「十二ヶ月風俗画帖」では菊花を鑑賞して楽しむ様子がみられます。

## ⑤ 人日

古代中国では正月七日を人日と言い、七種の菜を使った羹を食べる風習がありました。日本でも正月子の日に若草を摘み、羹にして食べる風習があり、しだいに一緒に行われるようになりました。現代でも七草粥を食べる慣習として受け継がれています。

◆ ◆ ◆  
これらの節句は明治六年(一八七三)、明治政府が太陽暦を採用したことともない、公的な祝日ではなくなりました。しかし民間では季節を祝う行事として、現代に至るまで受け継がれてきたものです。

本展ではこのような行事の歴史や習慣について、収蔵品を中心に紹介いたします。

(文責：千田 佑香)



雛飾り

## ④ 重陽

九月九日は一番大きな陽数(奇数)が月と日に

# 家康は国替なざるべきに

## おひては関東に替へ給へ

— 家康三河最後の一年 —

令和6年 11月2日(土) 13時~17時  
《会場》安城市中心市街地拠点施設  
アンフォーレ ホール



今回のシンポジウムタイトルは、『三河物語』に登場する一文で、天正十八年(一五九〇)七月、小田原合戦の後、秀吉が家康に対して発した言葉です。家康は、秀吉のこの言葉を受け入れて、三河、遠江、駿河、甲州、信濃の五か国から伊豆、相模、武蔵、上野、下総、上総の六か国へ国替えとなりました。今回のシンポジウムでは、江戸へ移るまでの最後の一年の家康やその家臣、あるいは秀吉の動向を各パネリストに報告していただき、家康の国替えの意義を議論しました。コーディネーター・パネリストには、松平シンポジウムに何度も出演してくださっている山田邦明氏(愛知大学教授)と谷口央氏(東京都立大学教授)に加え、山下智也氏(刈谷市歴史博物館学芸員)と佐藤貴浩氏(足立区地域文化課学芸員)を初めて迎えました。

初めに、コーディネーターの山田氏から、永禄三年(一五六〇)桶狭間の戦いに始まる三〇年間の三河の動乱を簡単に解



山田 邦明氏(コーディネーター)

小田原合戦時の秀吉方の輸送・伝達体制とそれを利用した家康領国への統治介入について報告していただきました。要旨は次の通りです。



山下 智也氏(パネリスト)

### 基調報告1

#### 豊臣氏輸送体制と織田・徳川家臣団

山下智也氏(刈谷市歴史博物館学芸員)

これまで小田原合戦については、前線や関東の情勢はよく知られていました。が、戦場から離れた三河の状況や物資輸送など秀吉方の後方支援についてはよく分かっていませんでした。しかし、秀吉の書状を通覧することで、その様相が見えてきました。家康・織田信雄が小田原に向けて出陣した後、秀吉は配下の武将を在番衆として両領国に配置しました。在番衆は、京から相模国までの人員や物資の輸送、情報伝達の中継が主な役割でしたが、家康・信雄配下の留守居役の監督も担っていました。秀吉は、家康・信雄の家臣の家に陣取りをさせないなど一定の配慮を見せつつも、留守居役に人足や馬、食料の供出などを強いました。小田原合戦の終結とともに、この輸送・伝達体制は終止符を打ちました。

### 基調報告2

#### 徳川氏の関東移封と松平家忠

佐藤貴浩氏(足立区地域文化課学芸員)



佐藤 貴浩氏(パネリスト)

佐藤氏には、『家忠日記』から読み取れる小田原合戦と関東移封について報告していただきました。『家忠日記』は、家康家臣の松平家忠が記したもので、戦国武将の日記は珍しく、武士社会の日常生活を知ることができる貴重な資料です。要旨は次のとおりです。

『家忠日記』には、小田原合戦における茶屋・舟橋

の普請が記録されています。家康にとつてこの戦が豊臣大名としての初の戦であり、秀吉を迎えるために入念に準備したことが伺えます。また、関東移封にいたる経過について『家忠日記』に記されていますが、ここからは秀吉の意図を読み取ることはできません。しかし、十月に起きた大崎・葛西一揆(宮城県北部・岩手県南部)において、家康が自らの判断で対処したことを秀吉が許していることから、秀吉が家康の軍勢力を豊臣体制維持に利用するため、一定の権限を認めていた可能性があります。そこから、家康の関東移封は、豊臣政権の中核の担い手として奥羽国を抑えるための布石だったのではないのでしょうか。

### 基調報告3

#### 徳川五か国総検地から太閤検地へ

谷口央氏(東京都立大学教授)

谷口氏には、家康の領国経営の一端として実施された「五か国総検地」について報告していただきました。要旨は次のとおりです。

天正十年(一五八二)から慶長三年(一五九八)まで実施された太閤検地は、近世封建社会の基礎となる石高制成立につながったと評価されています。五か国



谷口 央氏(パネリスト)

総検地は、天正十七年に三河、遠江、駿河、甲斐、信濃で家康が実施した

検地で、太閤検地の陰に隠れ、正しく評価されてきませんでした。この両検地を比較してみると、耕地面積や名請人は、太閤検地より五か国検地の方が詳細です。また、太閤検地のルールは最初から完成されたものではなく、十年以上の歳月の中で変化していきました。太閤検地は生産高を基準としている点で優れていると言われてきましたが、初期は五か国総検地同様、年貢高把握だったと指摘されています。それが朝鮮出兵のため、軍役高を勘案して増大し、生産高を意識するようになっていったと考えられます。五か国総検地は、石高を使わず、土地単位も旧来のものを使用していたため、これまででは正当な評価を受けてきませんでした。しかし、天正十七年時点では、太閤検地よりも高い精度を誇っていたという点で高く評価できるのではないのでしょうか。



### シンポジウム

シンポジウムでは、山田氏の進行で会場からの質問に答えたあと、今回のテーマでもある「国替えの意義」について、佐藤氏に意見を伺いました。

佐藤氏は、次のように述べました。家康は、これまで縁もゆかりもない関東に移封になりましたが、それにより新たに東北の諸大名等とも関係を築くことになりました。結果的に関東への国替えは、家康にプラスになったのではないでしょ

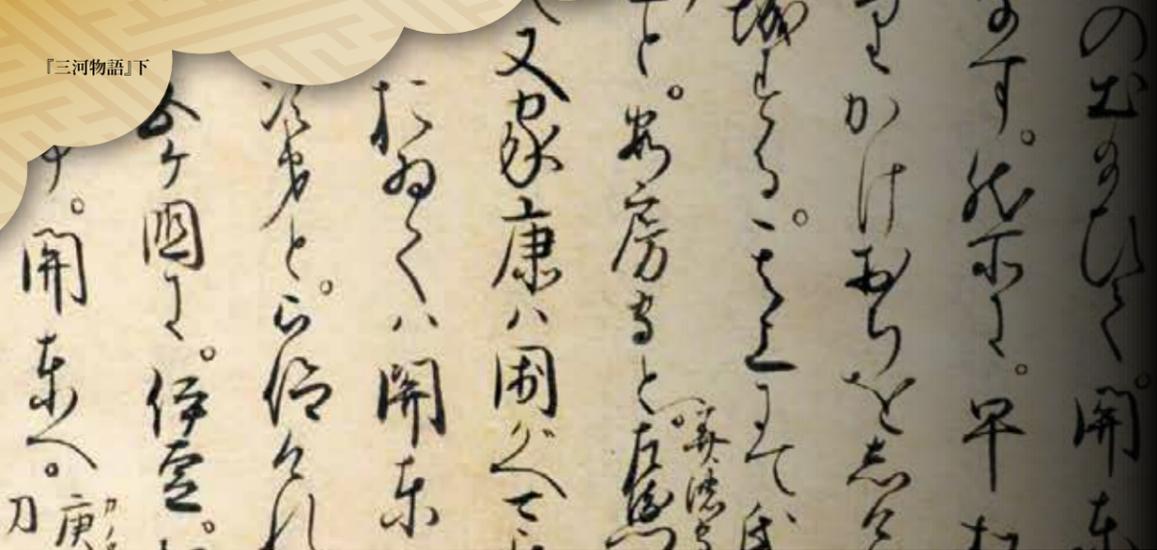
うか。家康に限らず秀吉による移封は、逆らうことができず受け入れるしかなかったという点で、近世の始まりを感じさせると指摘しました。

山田氏は、佐藤氏の発言を受けて次のように発言しました。中世・近世には国替えは当たり前で次々と変わっていました。護も短期間で次々と変わっていました。国替えは、転動のような感覚だったのではないのでしょうか。

また、山下氏と谷口氏の報告は、統合に向かう地域社会の動きと言えます。「日本列島の統合」という視点から両氏の意見を伺いました。

山下氏は次のように述べました。東海道統一の到達点は、慶長六年(一六〇二)伝馬役の定めです。しかし、その基礎は今川・北条・武田領国内に整備されていた共通の伝馬制にありました。それを後に家康が利用し、さらに秀吉が分断されていた各領国の交通を共通化していきました。

谷口氏は次のように述べました。最初



# 特別展 地震と災難

— 宝永地震から三河地震まで — 関連イベント

記念講演会 1月18日(土)14:00~

移住者たちの関東大震災  
— 被災地・横浜と郷里との関係を中心に —

[講師] 吉田律人氏(横浜市都市発展記念館主任調査研究員)  
[定員] 60名  
※空席状況については、お電話でお問合せください。

講話 1月13日(月・祝)10:00~11:00

能登半島地震における自衛隊の  
災害救助活動について

[講師] 竹井孝行氏(自衛隊愛知地方協力本部安城募集案内所広報官)  
[定員] 40名(事前申込み先着順)  
[場所] 歴史博物館 講座室  
[申込] 12月22日(日)9:00~電話受付

## 企画展 季節を祝う 関連イベント

記念講演会 3月16日(日)14:00~

平安文学から読み解く年中行事  
~ 枕草子・源氏物語を中心に ~

[講師] 勝亦志織氏(中央大学文学部日本文学教授)  
[定員] 60名  
[申込] あいち電子申請システム・往復はがきにて受付(抽選)  
※往復はがきの場合は、イベント名、氏名、郵便番号、住所、電話番号を明記し、往復はがきにて安城市歴史博物館まで郵送。※はがき1枚につき1名申込となります。

[申込期間] 2月1日(土)~2月23日(日)  
往復はがきでの申込は2月23日(日)必着

和菓子職人に教わる  
桃の節句の和菓子作り



[日時] 2月25日(火)10:00~12:00  
[講師] 清水崇司氏(両口屋菓匠三代目)  
[定員] 15名(事前申込み先着順)  
[参加費] 1,000円  
[場所] 歴史博物館 体験学習室  
[申込] 2月8日(土)9:00~電話受付

エントランスホールイベント

[日時] 2月8日(土)~3月23日(日)

歴博福よせ雛



折り紙で作ろう! 節句のかわいい飾り

なるほど節句クイズラリー

歴博福よせ雛

歴博講座 3月1日(土)14:00~

節句の変遷

[講師] 千田佑香(本館学芸員)  
[定員] 60名(当日先着順)

当日受付

ひなまつりインテリアパネルづくり

[日時] 2月15日(土)9:30~12:00  
[講師] 渡辺健一郎氏・古川智氏  
(ワタナベ鯉のぼり株式会社)



申込フォーム

[定員] 15名  
[参加費] 3,500円  
[場所] 歴史博物館 体験学習室  
[申込] 2月8日(土)までに  
専用フォームより申込  
(定員を超えた場合は抽選)

歴史を楽しく学べるカードゲーム  
「Hi!Story(ハイスト)体験会&自由対戦会」

[日時] 2月22日(土)  
①10:00~11:15  
②13:00~14:15  
③15:00~16:15



申込フォーム

[定員] 各回20名  
[参加費] 300円(ハイストオリジナルカードセット付)  
[場所] 歴史博物館 講座室  
[申込] 2月5日(水)より専用フォームより申込  
[監修] 株式会社Highsto



殺陣ショー、マルシェの開催など  
和にちなんだ催しを開催します

令和7年  
3月22日(土)  
10:00~15:00  
場所 安祥城址公園  
(※雨天中止)



ところで、中川覚右衛門は郷土の義民と呼ばれています。「義民」とは広辞苑によれば「正

た徳米の上で切腹をします。その場面でおそらくお孫さんの演技を見にみえたであろうこの年配の女性が手を合わせながら涙を流す姿があったからです。二〇〇年以上昔の話が、今日でも地元の人々の心を動かす姿に驚きました。今回はこの「中川覚右衛門」を取り上げます。

大学を卒業して、教職の道に進むことになった私は、昭和六十年四月、安城南部小学校に赴任しました。当時はまだ毎年学芸会が行われていました。南部小学校に勤務時代、三〇年以上たった今でも鮮明に記憶に残っている劇が「中川覚右衛門」です。劇のラストシーンでは、覚右衛門が倉に積み上げられ



学芸会(覚右衛門自害の場面)

を誉め、毎年五俵の供養米を覚右衛門家と与えることにしました。

中川覚右衛門は安城村(現在の東尾)の庄屋でした。安永八年は夏は日照り、秋は長雨と天候不順が続く、不作となりました。年貢米を上納できない村人は困り果て、覚右衛門に免租の手續きを哀願しました。そこで、覚右衛門は領主である旗本久永家に年貢の減免と郷倉の米の放出を願いました。しかし、旗本家も財政事情が苦しかったため、その願いは許されませんでした。思案にくれた覚右衛門は、郷倉にたてこもり、血書をしたため、和歌を首残して、米六〇俵の上に座り、村人のために切腹しました。領主側はこの実情を見て、この年の年貢は全免とし、郷倉の全ての米の放出を決めました。村人は「これ覚右衛門殿の肉を食らうなり、もったいなや」といつて涙を流しました。そして、領主は、覚右衛門のその見事な自害ぶりを誉め、毎年五俵の供養米を覚右衛門家と与えることにしました。

この出来事はその後も地元では語り継がれ、明治になると善提寺である明法寺境内に墓碑がたてられました。さらに覚右衛門が広く知られたるようになるのは、大正以降とされます。このころは郷土教育といつて、身近な地域を見つめる教育運動が盛んになってきていたので、その影響を受けていたことも考えられます。大正八年(一九一九)刊行の『安城町誌』では「第十六編人物第三章義人」の項で紹介されました。そして、昭和三年(一九二八)覚右衛門の五〇回忌には山崎延吉が講演し、覚右衛門をたたえた村民を大いに賞賛しました。さらに、昭和五年には明治用水土地改良区監事の岡田庄太郎が『安城町農会報』の中で「奮闘せる祖先の意気を忍ぶのも決して無意味ではない」と冒頭で述べ、覚右衛門についての話を掲載しま



墓碑(明法寺内)

この伝承に対しては、異なった説もあります。事件に対するもつとも古い記録である『米津家年代記』では簡単に「御蔵にて切腹」とだけ記してあるそうです。また、当時年貢の全免は普通では考えられないとの説もあります。さらに、自害したのは領主側への何か抗議も含まれていたのではないかという説もあります。このように伝承に対する異説はあるものの、覚右衛門の自害により郷倉の米は放出され、村人に分け与えられたようです。

(参考) ・安城歴史研究第四号(一九七八) 『中川覚右衛門の自刃伝承』 天野暢保

した。こうした「日本デンマーク」の時代を支えた中心的な人物が中川覚右衛門を高く評価したのは、当時の農民を鼓舞する意味があったと考えられます。戦後になると、昭和二十二年に安城神社に祭神として祭られ、昭和二十八年には昔郷倉のあったと言われる大乗寺の近くに頌徳碑が建てられました。また、東尾町内会では毎年追弔会を行ったり、芸能祭で覚右衛門の話や紙芝居で発表したりするなど、現在に至るまで伝承されています。

安城の義民としては、中川覚右衛門以外にも柴田助太夫や大屋長治郎の名が知られています。自分と同様、他人の幸せを願うことは大切ですが、しかし、自分の命を懸けてまで貫き通すことは容易にできることではありません。けれども、常に人として正しいことはどうするかなどを自分に問いながら、少しでも日々の生活ができればと考えています。



頌徳碑(大乗寺門前)

## 安城にゆかりのある人々2

文責・小田健二(安城市歴史博物館 館長)

連載